
俺と王子の奮闘記

甘楽由希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と王子の奮闘記

【Nコード】

N1866M

【作者名】

甘樂由希

【あらすじ】

女嫌いで真つ当な人生を送るのにぴったりの男子校に入学した「俺」だったが、同じく入学してきた「王子」と出会ったことで、俺の人生は一変する……！！ちょっぴり甘めな恋愛小説です。

＼登場人物紹介＼

キャラ設定

佐渡 栄泉（サド エイセン） 15歳 167?

真つ当な人生を送る事を望む普通の高校一年生。告白したorされた事は一切なく、恋愛というものの自体にそもそも興味がない。

恋愛＜勉強！！というモットーを持ちながら男子校に入学したが、阿呆王子と会ってしまってから、男子校に入学した事を後悔する日々が続いている…

阿呆王子（鈴木一郎） 15歳 170?

佐渡と同じ学校に入学した、一応同級生。ただし志望理由は佐渡とは全く違い、女子獲得のつもり（秀才が好みらしい）が、俺と同じ学校に入学してしまった、男子校とは知らずに……阿呆だ。

因みに阿呆王子というニックネームの由来は王子のような口調で話す阿呆だから。それだけ。

入学式編

「これって学校??」

俺の目は丸くなった。

目の前に見える巨体が、学校以外の何に見えるんだ??

そう思いながら、俺は学校に向かって歩きながら

「……学校だけど?」

睨みつけながら俺はそう言ってやった。

「嘘だね。ここは学校じゃない。牢獄だよ。」

……はあ??

いや何、素直に言おう。

阿呆か!!

今まで15年間過ごしてきたけれど、こんな馬鹿は見たことがないね!!俺は基本的には嘘つかねーし、つーか第一、牢獄って何だよ牢獄って!!

「学校は恋愛があつてこそ学校だろう。それなのに何だね、このムラムラとした空間は。恋愛もクソもないじゃないか。」

「はあ………」

と、俺は脱力感溢れた返事をした。この阿呆と会話してる事がものすごく情けなく感じるね。しかもコイツ、まさかとは思つが……

「ところで、さっきから気になってたんだけど。」

「…何?」

「僕の捜し求めているレディーはどこにいるか分かるかい?」

やっぱり!!俺の予想通り!

コイツ、ここがアレだって事知らないんだ！知らないのにノコノコこんなところに…！？

「いや、残念だけどここにはアンタの捜し求めている物は一切ないと思うよ。」

「どうしてだい？」

「どうしてって…ここは…」

男子校

だからだよ…！」

そう、ここは男といういい加減な生き物（お前も男だろ）しか入れない、と同時に、女嫌いの俺に相応しい場所だ。

俺が必死に勉強してクソ難しい試験に合格したのも、この素晴らしい世界に逝くためだ。まあ他にもいろいろ理由はあるけどな。…とにかく、話に戻るぞ。

「男子校…？」

「そうだよ！この学校は
アンタの捜し求めている物が全て排除された地獄のような場所って
事さ。まあ諦めろ。じゃ！」

と俺は、別にかつこよくもない捨て台詞（なのか？）を一息で言い
尽くし、さっさと学校に入ろうとした。この阿呆と関わっていると、
いろんな意味で危ない気がする！避難だ避難！
……がかし。

「待ちたまえ。」

頼むから、俺の鳥肌を立たせるその王子口調はやめてくれ。

「…何だよ。」

俺もいちいち止まるなっつーの！って、この阿呆…急に真面目に語
りだした…

「僕は恋愛なしでは生きていけない。今までも、そしてこれからも
ね。こんな牢獄にいたら、僕はきっと明日には木乃伊になって……」

「はいはい、ミイラになろーがアンタなんかはどうでもいいよ。で、
俺に何の用だよ。」

阿呆王子……っ！

「用というよりはお願い、かな。」

僕と、

付き合ってくれない？」

突然だった。

それは、阿呆な王子からの

「僕と付き合ってくれない？？」

「！？」

落ち着け、落ち着こう。

「えっと……何でだ？」

「恋愛がしたいからに決まってるだろう。」

即答しやがった！しかも理由が無茶苦茶だ！

「……俺は男だ」

「百も承知さ」

「じゃあ何で」

「好きだから」

……何でって聞いても無駄だろうな……きつと。

「まあアンタの気持ちは分かった、よく分かった、だがな、取り敢

えず！」

俺を変人にしないでくれ！

数々の男子生徒やら保護者やらの視線からようやく解放された、場所をちよつとばかり変更し、人気のない裏庭へ行った。

「……………で？君の返事は？」

周囲の野次馬にも気にせず、堂々と（しかも男子校の前で）告白宣言したのを気にもしてない……………阿呆だからか。

「悪いけど、俺は恋愛には興味ねえんだ。他当たれ他」

とまあ普通ならこれでさいならといくところ。普通ならなっ！

「君、馬鹿？」

……喧嘩売ってんのか？？
一気に殺意が沸いてきたぜ。

「男子校」恋愛なしと考える君の頭はどうかしてるよ……全く」

いや、どうかしてるのはお前の方だよ！

「まあ君がどう思っていようと……僕はもう決めたから。」

「何をだよ」

「君を守るってね」

……どういことだ？

「それより早くしないと……始業式が始まるよ」

「えっ……あぁっ！！もう開始1分前じゃねーか！もっと早く言えよ！……ってあの阿呆いねーし！！待てコノヤローー！！！」

体育館に向かう途中、あの王子の言葉が、ずっと頭から離れてくれなかった。

入学式といえば恒例の校長の話や、PTAからの話など……まるで説教のように長く感じられるこの時間、いつもなら眠って過ごすのだが　今日はずっと考え事ばかりしていた……。

「君を守るってね」

何故、俺が守られなきゃならないのか。自分はそんなに弱くはないはずだ……と思いたい。

よく考えてみれば俺は結構体育会系で、中学の頃はずっとサッカーや野球や部活の掛け持ちばかりしていた。

けれど

「……目標を持って行動するというのは非常に大事な事ですね。」

なにも変わっちゃいなかった。

（さあて帰るか……）

無事に入學式が終わった、……俺の人生も半分終わってるんじゃないかと思いつつ、早く教室に帰りろうとした、その時

「……」

あいつが隣にいた。…いつの間に？

「……。」

中高一貫でもない高校の入學式だからか、あまり会話をしている生徒はいない。とても静かだった。そんな中、俺が思い付いた話題はただ一つ

「王子……って呼んでもいいか」

もっとマシなのなかったのかよ、俺。……後でどうせ自己紹介はやるだろうが、俺にはこの呼び方以外考えられない。

「別に僕は構わないけどね。……でも僕の名前には似合わないかも」

「……」

「性格とかなら似合うかな」

「……性格か」

そういえば俺も昔は性格で随分悩んだ事もあった。
誰かを失った事も勿論ある。
だから、

「…もう誰も失いたくない」

しまった、つい…

けれど王子は、俺の顔を見て

「大丈夫、僕は消えない
絶対に」

とっただけだった…

「……本当か」

「まあね、多分」

「俺は…さっきも言ったけど、恋愛には全く興味がないんだ」

「うん。」

「でも、……誰かと共に生きたいっていう気持ちは一応持ってるらしい」

俺は何でこんな話を話しているのか分からない。
俺は……一体なにがしたかったのだろう。

「……………王子」

「…何？」

「昔の話になる」

「…長くなりそうだね」

「いやそんなに長くはない」

「…長そう」

「いやだから長くは…」（エンドレス）

『いい？いい子だからそこで待ってるのよ。』

『うん…分かったよ』

『お兄ちゃんと仲良くするのよ。』

『……うん。』

いつだか覚えてないけれど、小さい頃に兄と俺は、施設に預けられた。

この時預けられたばかりの俺には状況が分からなかったので、日々性格が変わっていく兄を見て

『兄ちゃん、大丈夫？』

と言っていたものだ。性格が段々きつくなるっていうのか？よく俺に暴力を奮うようにもなった。兄はきつと俺の事が嫌いになったんだなと思う、

『兄ちゃん、

バイバイ』

…こうして俺は一人暮らしを始めた……

「そんなに長くはなかったね」

「だから言っただろ」

「んで、今も一人暮らしなの？」

「……ん、そう」

「ふーん、じゃあ

僕と一緒にだね」

……は？そうなのか？

「もちろん君みたいに哀れな家庭の事情があつた訳じゃないけどね」

「じゃあなんでだ？？」

「秘密」

何故秘密！？

「というわけで僕に一つ名案が浮かびました」

「一体何だよ…」

「それは…そうだね残念ながらもう教室に着いてしまったから……
放課後2人で（重要）ゆっくり語ろうか」

なんか今王子の顔に真っ黒いオーラと笑顔が見えたきがしたんだが…

「……って待てい、放課後って何だ!？」

「だから、下校時に決まってるじゃないか。じゃあせいぜい（僕の名誉?のために）担任に目をつけられないように頑張ってくれたまえ」

「番号に書いてある通り、席に座れよー!」

生徒のざわつきよりも担任の声がやけに大きく聞こえた。

「…ありがとう、とだけ言っておく。」

「ものすごく感じの悪い御礼をありがとう」

「ところでさあ…何でおまえ

俺の後ろの席にいるんだよ!？」

出席番号順に並べられた席だから、俺と近い名前…なのか？

「何でって……そりゃあ

「こらあ鈴木い！」

担任の剣幕に俺はびくつとした。俺の名前じゃない…よな？

「今から話し始めるから、さっさと席に着いてくれないか、頼むよ」

「分かりました、先生」

「……見かけの割には、随分似合わない苗字だな」

「…そう？」

「まあ名前なんて、どうでもいいけどな。後で変えようと思えば変えられるだろうし」

「……まあね」

一体これからどんな事が起こるのか、馬鹿の俺には全く想像がつかない。しかし、どうせなら上手くやっていきたいものだ。はたしてその願いは叶うのか……

「というわけで、これからよろしく、

佐渡君」

なんだか、いけるかも。

- 終 -

俺ん家編 前

「はぁ…ここが俺ん家」

目の前には、俺の住んでるマンションが見えている。

そして俺の隣にはなぜかあの王子がいる。

なぜか？…………俺が聞きたい。

「さあとつとと帰……………」

「狭いなぁ」

「…………はぁ？#何が」

「このマンションは築15年、10階建て、LDKみただけど、ペットも飼えないみたいだし」

ペット関係ないだろ。それでなんで分かるんだ何で…

「まあせつかくだから君の部屋にお邪魔しようかな。」

「もう勝手にしてくれ…、なにもかも許してやれる気分になるぜ」

「今日は随分と無気力だね」

「別に。毎回ツツコミするのが疲れたただけだ。……ってもう行つて
るし」

王子はさつさとエレベーターに向かって歩き出していた。俺も遅れて王子に付いていく。

そして、俺はエレベーターに乗って……

王子が「4」というボタンを押している所を見た。

「おいっ、お前何で」

「君には関係ないよ」

「いや、思いっきりあるだろ。お前ここ初めてじゃないのか!？」

「超能力ってやつだよ」

「……………」

この王子は何を知ってるんだ。何が言いたいんだ。もしかして俺の
ストーリーか？

…冗談じゃない!!!!!!

お前には聞きたい事がたくさんありすぎた。
でも…まだ聞けない。
聞いてはいけないのかもしれない。

これが、全ての始まりだった。

「俺の部屋にて」

何故か、

俺と王子の二人しかない。

「親はいない、親戚もいない、……って何ともベタな話だよね」

「悪かったな。とりあえず、まず靴を脱げ！！靴はいたままあがってくるんじゃないやねえよ汚ねえー！！」

ああ昨日雑巾がけをしたばかりの床が……一瞬でボロ床に。

「失敬な。ここでは土足であがってもいいと法律で決まっているはず」

いや誰が決めるんだよんな事、お前が勝手に決めたんだろ！！！#

「分かった、分かった！！地理がものすごく苦手そーなお前に行

つとくが、ここは日本！J A P A N だ！！」

「日本？」

……へ？？なんかこいつ変だぞ。いやもとから変かもしれないが…

（今度は絨毯踏んでるしな）

この王子はまるで自分がどこにいるのか分からない、という風に話しているかのようなが……

（……まあいい）

別に俺には関係ない、ただボケてるだけだと軽視していた。

というより、そうする他ないなと思った。なんでかよく分からん奴。

どうか適当に座れと俺が言う前に、既に座っている王子に俺は切り出した。

「で？何をしたら出てってくれるのかよ…王子」

「その前にまず、」

な、何だよ……

俺ん家編 中

「……茶は自分で入れろよ」

「そこにあるの使っていいかい？」

「……………好きにしろ」

俺と王子は互いに顔を見合わせてから、……………先に王子が喋った

「このお茶■なかなか美味いね、どこで買ったの？」

俺はそっけなく答えた。とにかく早くこの場から逃げ出したい。

「……………別に」

「今度僕も作ってみよう」

「……………勝手にしろ」

「ねえ、何で君はそんなに僕のが嫌いなのか？」

「……俺の勝手だろ」

「それもそうだね、でも気に入くわないんだろう？」

「……」

そんなの知るかよ。

とにかく気に入らない。

その馴れ馴れしい態度とか…

あとは……って……あれ……なんだか……

眠……っ！

ここで俺は初めて気づいた。

．．．．．

「君にしては警戒が足りなかったんじゃないのかな？」

「……………くそっ」

もっと早く気がつくべきだった。

あの野郎……睡眠薬なんか……

「お前こそベタじゃねえか……」

……『俺』の記憶は、

そこで途切れた。

「……ふうやれやれ、彼は効き目が遅かったなあ

……隠れてないでさっさと出て来たらどうだい？」

「……チッばれてたか」

ドアから入ってきたのは、王子と同じくらいの身長がある男だった。

「……用件はただ一つさ」

「…何だい」

男は深呼吸をして叫んだ。

「わかってるんだろ」

「………そいつを俺に渡せっ!!」

俺ん家編 後

「無理だよ、二郎」

「そうか……ならばちからづくで!」

「よし、喧嘩は外でやろうか」

（ここ一応人ん家だし）

（相変わらずだな一郎………）

「いつも通りの『武器』でいくよ、僕は」

「ああ！…そうだ俺今回だけは違つ『武器』を持ってきたんだ！…」

「……」

少しだけ一郎は警戒した。

「…これだつ！…」

「…鉈??」

「そうだ！！…俺は『ひ○らし』で使われての見て懂れて、ようやく手に入れたんだ！！ひ○らして知ってるか？もうそれは最高なアニメで（略）」

「ふーん…別にどうでもいいけど、おしゃべりも程々にね」

「…なんで後ろに?!」

「勝つのは僕だと決まってるんで」

「……!?!」

二郎は思いきり殴られた。

二郎はすぐ倒れた(早)

「君に邪魔なんかさせるものか」

一郎は消えた。

……

はあ、ソファーなんかで寝たから、頭痛い……

「……………もう夜か」

いつの間にか日は沈んでいたらしい。

「……！お前」

王子はいた。

「……………」

「お前……何……持ってた？？」

「これ？」

「」

眠気がなくなり

意識がはっきりし始めた時

二人きりの誕生会が

始まった。

俺ん家編 完

二人きりの Birthday 編 前

「再び俺ん家にて」

はあ………

今俺の目の前にあるもの

？王子

？ケーキ

？豪華な金の紙に包まれたプレゼントらしきもの（？）

…

………

？は分かる。？は勝手についてきたストーカー。

「?と?は……
?に聞くしかないか。」

「?と?ってなんだ?」

「?は君の誕生日だから持ってきたのさ」

何で通じるんだ!! 本当にこいつエスパーか?

そんで何て言った……
『誕生日』!?

「今日そついえば俺……誕生日……」

「そうだね」

「何でそんな事知ってるんだ?？」

学校でやった自己紹介で言った覚えはないが……

すると王子は一枚の紙を取り出した。

「なんだそれは」

「君の戸籍書」

いろんな意味ですごい!!

つか人の戸籍書盗るのって犯罪じゃないか!?

「?は君へのプレゼント」

「言わんでも分かるわそれぐらい」

「全く素直じゃないね」

悪かったな。

「とにかく」

誕生日、おめでとう

「……ありがとう」

ドキドキ

……ってなんで緊張してんだ。

親が死んでしまっただけからは祝ってもらった事なかった。

だから……なのか

「……？」

泣けてくるんだろうか。

「……」

「食べるかい？ ケーキ」

「……うん」

俺は涙が出るのを堪えながらなんとか声をだした。

「因みに自家製だよ」

やっぱりお前すげえええー！！！！

二人きりのBirthday編 後（前書き）

くいきなり警告く

ここからはいよいよ王子が本格的なアプローチをします。

苦手な方はご注意を…

二人きりの Birthday 編 後

「泣かないで」

「く……」

俺が泣き止まないのが分かった、王子はいきなり顔を近づけてきた。

なっ……

いきなりA!?

「んっ……」

何て声出してんだ俺！！

しばらくしてから離された。

「……止まったかな？」

不思議なことに止まっている。

涙はあまり見せなくなかったのだが…

「…なんだか眠くなってきた……ってもう21時じゃん」

「…本当だね」

「………もう帰った方がいいんじゃないのか」

一応高一だし、と俺は付け加える。

「でも君が困るんじゃない？また寂しくなって泣きそうな気がする」

そこまで子供じゃないぞ。

「……僕にも両親いないから、君が気にする必要はないよ。」

……忘れてた。そういえば入学式の時言ってたな…。

「……ごめん」

「いいよ」

ドサツとな

ひい！！なんか知らんけど俺押し倒されてるー！

「初めからそのつもりだったのか」

「まあね」

って俺も何呑気に質問してんだよ！早く逃げろよおお！！

と思ったけれど、意外と王子の力が強くて

振りほどけなかった

しかも、さっきから変だ。

顔は勝手に赤くなるし、

「好きだよ」

という台詞にドキドキしてるし！

…誕生会は、まだまだ終わらない。

二人きりの Birthday 編 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1866m/>

俺と王子の奮闘記

2010年10月28日03時16分発行